

# 明治期の安部磯雄

辻野功

はじめに

日本の社会主義運動の大きな特質の一つは、議会主義的社会主義が定着せず、急進的直接行動主義が支配的地位を占め、その結果議会主義的社会主義は「不徹底」「日和見主義」「階級協調主義」等々の響きを帯び、負価をもつものとして受けとられがちな政治的風土を生みだしたことである。このような政治的風土においては、議会主義的社会主義の路線を誠実に、かつ着実におし進めていこうとする勢力は、なかなか成長しがたい。そればかりか、現在も革新運動の一部にみられる、口先では革命的言辭を弄しつつ裏では支配者階級との取り引きをこととするような政治行動のパターンは、このような政治的風土がもたらした最も悪しきものの一つである。

しかしながら日本の社会主義運動は、その出発点から急進的な直接行動主義を行動の指針としたわけではなく、逆に議会主義的社会主義こそ、日本の社会主義運動が掲げた最初の旗印であったのである。一八九〇年代の終わり、安部磯雄・村井知至らの社会主義研究会・社会主義協会によって展開された社会主義運動も、幸徳秋水・堺利彦らによ

って展開された平民社の社会主義運動も、その旗印は議会主義的社会主義であった。その社会主義運動が議会主義から急進的直接行動へ急旋回したのは、一九〇六年に幸徳秋水が「直接行動論」を唱えてからである。以来今日に至るまで、議会主義的社会主義は急進的社会主義にイデオロギー上のヘゲモニーを奪われたままである。そこで本稿では日本における最初の、そして終始一貫した議会主義的社会主義者であった安部磯雄の明治期における思想と実践を検討することによって、「日本では議会主義的社会主義がなぜ定着しなかったか、なぜ着実な発展をみなかったか」という問題を究明してみたい。安部磯雄は明治期において議会主義的社会主義の第一の理論的指導者であり、彼の思想と実践は議会主義的社会主義の消長に大きくかかわっていたからである。

安部磯雄に関しては、すでに、慶応大学中村勝範助教授の「議会主義的社会主義者の責任——明治期の安部磯雄——」（『明治社会主義研究』一九六六年、世界書院刊所収）という注目すべき論稿があり、筆者も教えられるところが多かったのであるが、ただ読後「安部に対して冷たすぎはしないか」、「安部にのみ責任を問うすぎではないか」という感じを拭いえなかった。そこで本稿では、安部磯雄の「思想形成」、「社会主義理論」、「実践活動」を検討することによって、私なりの「明治期における安部磯雄像」を確立し、同時に前述した議会主義的社会主義路線挫折の問題をも考えてみたい。

## 一 思想形成

安部磯雄は一八六五年（慶応元年）二月四日、福岡黒田藩土岡本権之丞の次男として生まれた。彼が安部磯雄になったいきさつは、まことに興味深いものである。

丑年の者は元氣旺盛兄を凌ぐという迷信のため、生まれるとまもなく親戚の村上家へ養子にやられた。むろん名義

だけのことであったが、もし村上家に男子が生まれなかったならば、彼は村上磯雄であって、後に彼の妻となった村上駒尾とは兄妹として終わったかもしれない。しかし、やがて村上家に男の子が生まれたので、彼は本来の岡本磯雄になったのである。その次に彼は竹内磯雄となった。同志社入学後の一八八三年（明治一六年）二月のことである。一九歳の岡本磯雄が、三三歳の顔を見たこともない竹内某女の入り婿になったのは、ただ徴兵をのがれるためであった。そのころの徴兵令によると、扶養家族をもっているものは徴兵が免除されたが、次男だった彼には扶養家族がいなかった。彼の父はこの名義だけの入り婿になることを勧めたのである。ところが一八八五年には徴兵令が改正され、既婚者でも六〇歳以上の老人を扶養しなければ、徴兵免除の特典は与えられないことになった。困り果てた彼は、竹内家から「家風に合わぬという理由で」離縁してもらい、六〇歳以上の老人のいる家庭を八方手をまわして探した。幸いにして注文通りの家が見つかった。それが安部家である。彼は、当時の養子相場の一金一五円を支払って安部家の養子になった。こうして後年の社会主義者安部磯雄が出来上がったのである。

安部磯雄が新島襄の同志社に入るまでも、また若干のエピソードがある。彼の生家の岡本家は黒田藩で禄二〇〇石を食んでいたが、五三万石の大藩では、家柄としては中流以下であった。それでも乳母、下男三人、女中三人を雇う、相当豊かな暮らしであった。しかしこの岡本家も明治維新の嵐に巻き込まれ、秩禄処分をうけてからは収入の途もとがえた。父岡本権之丞は、武芸で鍛えあげた腕力を利用して、臼を挽いて麦粉をつくったが、長続きせず、次には養蚕を試みたがこれも失敗、結局、武芸者でありながら、不思議にも得意としていた写字の術をいかして福岡県庁に書記として勤め、細々ながら生計を立てることになった。安部磯雄の兄も一時、綿打ち工の徒弟となっていたほど家計はみじめであった。

一八七九年（明治一二年）三月、安部磯雄は、付属小学校を優秀な成績で卒業した。しかしながら、上級学校への

進学はあきらめ、近村の漢学塾・知足堂に入った。ところが塾生活三カ月目の六月下旬のある日、父から至急帰宅せよと言ってきたので、六里の道を急いで帰ってみると、そこには同志社進学の話が待っていた。海軍軍人志望の彼の義兄・浅香竜起は、英語習得のために同志社に学んでいたが、その浅香が磯雄の才を惜しんで、彼を海軍軍人にするために同志社へ進学させてはどうか、学費は自分が援助をしよう、と申し出たのである。海軍軍人になることをなお名誉と思っていた少年安部磯雄は、この話を天にもものぼる心地で聞いた。もちろん彼の父に、異論のあろうはずはなかった。しかし彼も彼の父も、同志社についてはまったく知らなかった。浅香もまた同志社がキリスト教主義の学校であるなどとは一言も言わなかった。それは彼がキリスト教に関心がなかっただけでなく、もしこのことを言えば、安部磯雄の父は反対するにきまっていると考えたからである。安部磯雄は後年、「私の頭にも耶蘇教は邪教であるということが幾分浸み込んで居たのだから、義兄が正直に事実を語って居たならば、私は永久にこんな幸運を逸して居たことであろう<sup>(1)</sup>」と語っている。

こうして一八七九年九月に同志社に入学した安部磯雄は、一・二学期は浅香とともに下宿生活をおくり、三学期は帰省して自宅で学習した。だから真の意味における同志社生活は、彼が寮生活を始めた二年生の時からだと言える。当時の同志社の教育は、そのキリスト教主義以外に、学課編成においても大きな特色をもっており、一学期三科目ないし四科目制の集中主義を採用していた。たとえば、五年生は第一学期が、心理学・論理学・経済学、第二学期が心理学・天文学・政治学・倫理学、第三学期が地質学・英文学史・倫理学というふうにある。したがって、一日の授業時間も午前中の三時間で終わり、午後と夜間は予習のために費すという、自学自習主義がとられた。そして一年生の時、徹底した英語教育を行なったばかりでなく、英語以外の各科目の教科書も、すべて英書を用いた。当時京都には、まだ洋書を取り扱う書店はなかったので、学生の使用する教科書その他は、ラーネッド博士 (Dwight Whitney

Learned) が、直接米国から取り寄せたのであった。授業は、月曜日から金曜日までで、土曜日は体育に、日曜日は徳育に当てられていた。

同志社で五年間の学生生活をおくった安部磯雄は、新島襄から決定的な影響をうけた。当時まだ四〇歳に満たない新島襄は、いつも学生とともにあった。彼はすすんで学生の行事に加わり、学生と苦楽をともにしていた。また彼は学生を決して呼び捨てにせず、どんな人をも何々さんと呼んだ。そして「私共は神の前に於て誰も同胞兄弟であるから、今後皆さんはどうぞ私を新島さんと呼んで下さい」と、まじめに学生に要求したほどである。新島襄に体现されているこのような同志社のデモクラティックな校風は、海軍軍人志望の安部磯雄にとっては驚異であった。二年生になると、彼はもはや海軍軍人になる夢を放棄し、徹底したデモクラットに生まれ変わっていたのである。

同志社生活は、海軍軍人志望の安部磯雄を、デモクラット安部磯雄に変えただけではなかった。かつての邪教・キリスト教が、彼の心の支えになったのである。その回心の動機について彼はこう記している。それは一八八〇年（明治一三年）の一二月末、期末試験に備えて、懸命に地理の暗記をしていた時のことだった。鼻と唇の間に出来た腫物があたかも針で刺すように痛んだ。府立病院で診察を受けると「瘍」だと言う。瘍の恐ろしさを聞かされていた安部磯雄は、愕然として、とにかく手術を受けた。数日間生死の境をさまよっている間に、彼は「若し基督教の説くが如く死後尚来世があるとすれば、私共は敢て死を恐れるに足らぬではないか。然し永遠の生命ということが果して事実であるかどうか。幸いにして此度死を免れることが出来るならば真剣に基督教を研究しよう」と決意した。<sup>(3)</sup>病氣全快後、彼はキリスト教研究に打ち込んだ。聖書を読み、日曜日の説教は熱心に聴き、その他の宗教的集会にも努めて出席した。こうして四カ月後には、彼は熱心なクリスチャンになっていた。そして一八八二年二月五日には、今出川通の第一教会で、同級生岸本能武太、新原俊秀らとともに、新島襄から洗礼を授けられた。

クリスチャンになった安部磯雄は、そのころ同時に社会問題に対しても強い関心をもつようになっていた。貧困の問題が彼の心をつよくとらえたのである。同志社の北にある臨済派の相国寺の境内は、学生たちにとっては、思索の場であって、彼もまた朝食後はよくそこを散歩したが、そこで彼は松の木の下で一夜を過ごした乞食の群れを見ることとがしばしばあった。これを見るたびに、明治維新の激変で豊かな生活から急転直下転落した貧乏生活の体験のある安部磯雄の心は痛んだ。

キリスト教における精神主義と物質生活上の貧困という、一見矛盾的な問題の前に立って苦しんでいた彼が、一九歳になった一八八三年の秋、初めて、“Bible and Economics”を強調してやまなかったラーネッド博士から経済学を学んだ時、その疑問は一応、氷解したかにみえた。「精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて指導されるべきものである<sup>(4)</sup>」というのが、その時彼の到達した結論であった。しかしまだこの段階にあっては、彼は社会問題を解決するのは社会事業であるという程度の漠然とした認識を持っていたにすぎなかったのである。

英学校正課を卒業した安部磯雄は、帰郷せずに、丹波地方で二カ月間キリスト教伝道に従事した後、神学校に進んだ。安部はここで初めて、キリスト教の理論的研究に本格的にとりくむことになったのである。神学部ではおもにアメリカの宣教師が講義に当たっていたが、その神学はあまりにも伝統主義的なものであって、科学的な頭脳の彼が受け容れられるようなものではなかった。そこで安部磯雄と村井知至とが中心になって仲間といっしょに、(一)三年の科目を二年に短縮すること、(二)担当者グリーン博士(Daniel Crosby Greene)を変更することを学校側に要求したが、容れられなかった。学校側の態度を不満とした安部と村井は九月二六日、ついに同盟して退学した。それは神学校に入学してわずか一日目のことであった。

こうして同志社を去った安部磯雄は、父の希望に従って故郷の福岡へ帰り、最初はメソジスト派の教会が設立した

英学塾で、次には、豊前田川郡の香春学校で英語教師を勤めた。やがて一八八六年一月、彼はゴールドン教授 (M. J. Gordon) の勧めで同志社に復帰し、今度は教師として母校の教壇に立った。しかし安部磯雄は、翌年の一八八七年四月には、新島襄の補佐役として同志社に来ていた金森通倫の後任として、岡山教会に赴任することになった。彼はまず大西祝の生家に落ち着いたが、大西は英学校正課で彼より三年上級であり、後には帝国大学文科大学を卒業し、東京専門学校 (早稲田大学の前身) で哲学を講じ、明治中期哲学界の第一人者として活躍するのであるが、安部からみれば、「彼は学才から言うても品性から言うても当時の同志社に於ける第一の模範生であった。」<sup>(5)</sup>

安部磯雄は、ただ一つのことを除いて、極めて熱心な牧師であった。その唯一の例外とは、布教のために教会員や求道者の家庭を訪問することであつた。「昔の漢学者は自ら進んで教を乞う者のみに道を説いたけれども、決して儒教の押売はしなかつた。若し基督教を熱心に研究せんとする人があるならば、其人は進んで牧師の下に來りて教を受くべき筈ではないか」<sup>(6)</sup>と考へた安部は、このような訪問をやむをえざる義務として、ある程度不快に感じながら行なつたのである。「真理の押売」<sup>(7)</sup>に対する彼の嫌悪は、なにも宗教活動においてばかりではなかつた。彼は、後に従事することになつた社会主義運動においても、決して「真理の押売」をしなかつたのである。後年安部が、宗教界から教育界に転ずるようになったのも、その主たる理由は、この「真理の押売」に対する嫌悪にあつた。

安部磯雄は、彼の師・新島襄の死の翌年の一八九一年 (明治二四年)、岡山教会から許されてアメリカに留学した。留学の目的は、聖書の歴史的価値の研究と社会問題の研究とであつた。留学の目的の一つが社会問題の研究であつたことは直ちに理解できるが、他の一つが聖書の歴史的価値の研究であつたことは若干の説明を必要とする。すでに述べたように彼は「瘍」を契機に熱心なクリスチャンになつたのであるが、当時の彼のキリスト教信仰はあくまでも正統的なもので、キリストが処女マリアから生まれたとか、十字架の上で磔にされながら三日の後蘇つたとか、水上を

歩いたとか、水を変じて酒としたとか、五個のパンをもって五千人を養ったとかというような奇蹟や不可解なドグマをも丸呑みにしたほどであった。しかしながら彼は、このような正統的な信仰に少しずつ疑問を抱くようになっていった。彼は神学校へ入学した時、すでに伝統的神学にあきたらなくなっていたが、このようなことを自ら信ずるだけではなく、人にも信じさせることを職務とするようになった岡山教会の牧師時代に、疑問は一層深刻になった。あたかもこの時、日本のキリスト教界には新神学運動が起こった。新神学は主としてドイツの神学者が唱えた学説であつて、これによれば聖書の中にある超自然的な奇蹟は、後世の人が附加したもので、なんらキリストの教訓とは関係がないとするのである。安部磯雄はこの新神学が唱える説には十分の理由があると考えたけれども、まだこれを全面的に承認するにはいたらず、「将来バイブルを歴史的に研究したいという考えを起した。」<sup>(8)</sup>かくして聖書の歴史的価値の研究が、留学の目的の一つになったのである。

安部磯雄が学んだのは、コネチカット州のハートフォード神学校であつたが、ここはかなり保守的な神学校で、新神学などには全く反対であつた。にもかかわらず彼がハートフォード神学校を選んだのは奨学金等の関係からであつて、彼はやむをえず聖書の歴史的価値の研究には独学でとりくんだ。しかしこの聖書の歴史的価値の研究にもましてとりくんだのは、社会問題の研究であつた。

安部磯雄は、一八九三年（明治二六年）六月、夏休みを利用してニューヨーク市へ社会事業見学の旅に出た。そのとき彼は、「ニューヨークには一千以上の社会事業が行われて居る。ロンドンの社会事業は其数に於て遙に優つて居ると聞いて居る。然も社会事業の数は年々増加しつつあるというではないか。これでは社会事業によりて社会の貧乏を根絶するということは永久に不可能なことではないか」と、今までの自分の考えに対して疑問を抱くようになった。ちょうどこのような時に、彼はベラミー (Edward Bellamy) の小説『ルッキング・バックワード』 (“Looking



“Backward” 1888) を読んで、思想的回心を経験したのである。これはベラミーが小説の形を借りて、社会主義の主張を簡単明瞭に説明したもので、一人の青年が地下室に眠っている間に火災が起り、彼は奇蹟的に助かったものの百年間眠り続け、目が覚めて地下室を出た時にはすでに社会主義社会になっていたという物語である。この小説を読んだ安部磯雄は、「恰も盲者の目が開いて天目を仰いだ」<sup>(10)</sup>かの感があった。

「貧乏は恰も火災の如きものであって、これを消し止むるために消防制度の必要なることは言うまでもない。然し消防制度のみに依頼して居る限り火災が永久に防止されるものでないということも考えなければならぬ。これが為文明人は結局木造家屋を止めて鉄筋コンクリートの家屋を建築するようになった。これと同じく、貧乏防止のためには社会事業という応急的施設が必要であるけれども、私共は永久にこれに信頼することは出来ない。要は木造家屋からコンクリートの家屋に進むにある。現在の経済組織には、貧乏が発生するという必然的素因が含まれている。これを社会主義に改造すれば貧乏問題も根本的に解決されることになる。」<sup>(11)</sup>

これがベラミーの『ルッキング・バックワード』を読んだ時の彼の感懐であったが、この時彼は社会改良主義者から社会の変革を志す社会主義者となったのである。かくして安部磯雄は同じ頃社会主義を信ずるようになった級友のガダートやデイヴィスらとともに、公然社会主義者を名乗り、三人揃って社会主義者を表わす赤色のネクタイをつけて、教室や食堂にあらわれた。彼は心中、いささか昂然たるものがあった。

このようにして安部磯雄は社会主義者になったのであるが、しかし「私共は生きんがために食うのであって、食わんがために生きて居るのではない。結局私共には精神生活が目的であって、物質生活は其手段に過ぎない」と語っているように、彼にとっては社会主義はあくまでも精神生活の手段の位置にあった。彼の考え方を示せば次のようになる。

(一) 精神的問題 (＝目的) を解決するもの—キリスト教

(二) 物質的問題 (＝手段) を解決するもの  
   / 社会主義＝根本的解決  
   \ 社会事業＝応急的解決

この(一)・(二)は、キリスト教の信仰理論の持つ二つの側面ではなく、一応別個のものであって、両者は人道主義という紐帯によって、分ちがたく結びついていると考えられた。

ハートフォード神学校での卒業演説は、「キリスト教徒の経済観」(A Christian View of Economics) と題し、その内容は彼の言によれば、キリスト教の人類同胞主義をそのまま経済組織の原則とすべきことを主張したもので、社会主義という言葉は使用しなかったが、実際は社会主義の主張であったと言う。この演説は、おそらく彼の社会主義の当時での到達点であるキリスト教社会主義を主張したものであったと思われる。

三年間のアメリカ留学は、またたくうちに終わってしまった。その間に社会問題の研究は、ほぼ満足しうる状態に達したけれども、聖書の歴史的価値の研究の方はなかなか光明がみえなかった。もしこのままで帰国することになれば、確信をもってキリスト教宣伝の任に当たることはできないと思つた安部磯雄は、ハートフォード神学校校長ハートランフト博士の世話で、ある篤志家から留学費を出してもらい、一二年間の計画でドイツへ留学することになった。一八九四年(明治二七年)六月三〇日、ハートフォードを出発した安部は、途中イギリスへ立ち寄りグラスゴー市とエディンバラ市を訪問して、そこで実施されているいわゆる「都市社会主義」について見聞をひろめた後、オックスフォード大学で開催される神学の夏期大学へ出席すべく、オックスフォード大学に向かった。彼が止宿したのは、大学セツトルメントとしては、トインビー・ホールと並んで有名なマンスフィールド・ホールであった。イギリス滞在中に、彼は都市問題、大学セツトルメント事業はもちろんのこと、救世軍の事業にも強い関心をもち、見聞をひろめた。

イギリスでの滞在を終えた安部磯雄は、八月八日ロンドンを発ち、ベルリンへ向かった。聖書に関する疑問を解決するためにドイツ留学を志した安部は、ベルリン到着後は社会事業や社会主義の研究は、一切中止した。そして彼はベルリン大学へ入学し、ハルナック教授の「教会歴史」とヴァイス教授の「新約聖書註釈」とフォンソーダン教授の「初代キリスト教の研究」とを受講した。さらに大学で研究するばかりでなく、下宿でも神学関係の書物のみを耽読して、研究を深めた。たまたまハイデルベルク大学のヴェンテ教授の『イエスの教え』(Lehre Jesu) 全二巻を読むにいたって、彼は従来の疑問を完全に解決できた。

私はこの書については、何の知識も持っていないので、安部自身の語るところを紹介すると次の如くである。

「此書は二巻より成立つ可なりの大冊であるのみならず、全部ギリシャ語で書かれた四福音書を詳細に解剖したものであるから、これを読了するには可なり多くの時日を要した。今此書の内容につき極めて其概略を述べて見たい。基督の弟子馬太<sup>マタイ</sup>が基督の教訓を集めて『ロギヤ』という書物を著わしたことはユージェビアスの歴史に記載されて居る。これは普く学者の知って居る事実であるけれども、何故か此の『ロギヤ』なるものは後世に伝えられて居ない。然し四福音書は何れも基督伝として今までに伝えられて居るに拘わらず、馬太伝ということは決して馬太が書いた基督伝という意味ではなく、馬太を根拠とした基督伝という意味であることは学者の等しく認める所である。ヴェンテ教授の学説はこれを出発点として居る。四福音書中路<sup>ルカ</sup>可伝は最も多く馬太伝と共通点を有するが故に此二書は必ず馬太の『ロギヤ』を材料として使用したものに相違ないということを仮定して、此二書の中から所謂馬太の『ロギヤ』を還元せしむるため、解剖的に一々ギリシャ語を研究して、遂に『ロギヤ』なるものを再現せしめたのである。これは即ち基督の教訓集であつて、基督の直弟子の一人たる馬太が記録したものであるから如何に時代を経るも容易に変化すべきものでない。其当時基督教は漸次遠隔の地にまで伝えられたのであるが、交通不便のた

め直弟子は一々これを訪問することは出来なかつた。これがため基督の教訓集を各地に送り、日曜日毎にこれを会衆の前で朗読せしめたものらしい。これが即ち『ロギヤ』であつた。恰も孔子の論語が何等の変化なくして後世に伝えられた如く、『ロギヤ』も又其のまま数十年後に伝えられた。然し直弟子も順次此世を去るようになったので、信徒の間には基督に関する歴史的事実が口から口へと伝えられた。即ち『ロギヤ』に記載されて居る基督の教訓の中これはユダヤの何所で為されたとか、これはガリラヤ湖辺で行われたとかいうことが、基督の教訓と相並んで人々の間に信ぜられるようになった。昔にこれのみではなく、基督の出生から死に至るまでの重なる出来事も直弟子の口から多数の信徒に伝えられたものと想像される。然し口から口に伝えられるものは決して記録されたもの如き確実性を有するものではなく、常に変化して遂には全く其原形を失うものである。要するに基督伝と見るべき四福音書なるものは二つの材料によりて構成されて居るといふことが出来る。第一は基督の教訓集である『ロギヤ』であつて、第二は基督に関する伝説である。第一は記録になつて居るから固定的であるけれども、第二は伝説であるから、流動的たらざるを得ない。四福音書は基督の死後約四五十年を経て編纂されたものであるといふことだから、これを見ても基督伝の真相が如何なるものであるかを容易に推測することが出来る。基督伝と称する四福音書は恰も額縁を附けた油絵の如きものである。即ち『ロギヤ』という油絵に伝説という額縁を附けたのであるから、額縁を油絵と同価値に見るのは適當でない。<sup>(3)</sup>」

安部磯雄はこれによつて積年の疑問を解決できた。そしてその後は聖書中の奇蹟を読んでも、以前のように不快になるどころか、むしろそのような伝説の生ずるようになった原因などを考えて、かえつて一種の面白味さえ感ずるようになったのである。

一八九四年(明治二七年)秋、岡山は大洪水に襲われ、教会のうけた打撃もまた甚大であつた。海老名弾正や宮川

経輝から、もしこのまま放置すれば教会は再び立つことができないかも知れないから至急帰国せよといってきた。その時、ベルリン大学における彼の神学研究はその緒についたばかりであったが、すでに聖書に関する積年の疑問を解決していたので、急遽ベルリンを発って、帰国の途についた。四年ぶりに故国の土を踏んだ安部磯雄は、まず岡山教会の再建に努力し、その後一八九七年（明治三〇年）一月には、すでに新島襄のいない同志社に帰った。

彼が再び同志社の教壇に立った一八九七年は、日本労働運動史上画期的な年であった。すなわち、日清戦争を境にして飛躍的に発展しつつあった日本の資本主義は、自己の発展に対応して、賃金労働者を急激に増加させていた。そして、一方における富の膨大な蓄積は、他方における貧困の蓄積となって現われ、わが国における労資の本格的な対立が、まさに始まらんとしていたのである。高野房太郎がこの年の七月五日に、片山潜らの協力を得て労働組合期成会を結成したのは、このような情勢の中においてであった。安部磯雄は村井知至とともに、請われてこの労働組合期成会の評議員に就任し、機関紙『労働世界』に寄稿するようになった。

安部磯雄が在職した頃の同志社は、学園の基本的あり方をめぐって、激動していた。すなわち、そのころ小崎弘道の後を継いで同志社社長になっていた横井時雄は、一八九八年二月二三日、東京において社員会（現在の理事会にあたる）を開き、「不易の原則」とされていた「同志社綱領」から、第二条の「本社ヲ同志社ト称ス、本社ノ設立シタル学校ハ総テ同志社某校ト称シ悉ク、本社ノ通則ヲ適用ス」（傍点辻野）を削除することによって、第三条の「本社ハ基督教ヲ以テ德育ノ基本トス」を有名無実化し、それによって徴兵猶予の特典を得んとした。横井の企ては一時成功したが、デイヴィス (Jerome Dean Davis) 博士らのアメリカ海外伝道協会や全国の校友たちの強い反対にあい、横井はついに一二月二八日、社員（理事）一同とともに責任をとって辞職するにいたり、綱領は翌一八九九年二月一八日旧に復した。この綱領削除問題の渦中に巻き込まれた安部磯雄は、同志社を去って上京し、一八九九年五月から東

京専門学校の講師になった。それは、彼より先に東京専門学校講師になっていた親友岸本能武太の推薦によるものであった。

安部が社会主義研究会に入会したのは、この頃のことである。規約第二条に、「本会は社会主義の原理と之を日本に応用するの可否を考究するを目的とす」と謳った社会主義研究会は、前年の一〇月に結成されたもので、その本拠は芝区三田四国町の惟一館（ユニテリアン協会）であった。会長は村井知至であり、片山潜、幸徳秋水らとともに、岸本能武太や新原俊秀もその名を連ねていた。安部、村井、岸本、新原及び山岡邦三郎の五人は、同志社時代以来、「五友」と言われたほど親密な級友であったが、そのうち四人までが社会主義研究会のメンバーとなったのである。なかでも村井知至は、一八九九年七月、『社会主義』を公けにし、当時社会主義の理論家として、安部とともに双壁をなしていた。その頃ユニテリアン派の機関誌『六合雑誌』は、社会主義研究会の模様を逐一報道していたが、一八九九年六月、安部磯雄がその編集にあたるようになってからは、「まるで研究会の機関誌たるかの観を呈した。」<sup>(4)</sup>かくして安部磯雄は社会主義運動に一步一步足を踏み込んで行くようになったのである。

註(1) 安部磯雄『社会主義者となるまで』一九三二年（改造社刊）四〇ページ。

- (2) 同右 八四ページ。
- (3) 同右 九〇ページ。
- (4) 同右 一〇二ページ。
- (5) 同右 七七ページ。
- (6)・(7) 同右 一五二ページ。
- (8) 同右 一六二ページ。
- (9) 同右 二〇一ページ。
- (10) 同右 二〇二ページ。

- (11)・(12) 同右 二〇四ページ。  
(13) 同右 一三九〜二四一ページ。  
(14) 木村 毅「明治前半期の社会主義思想と社会運動」『社会科学』第四卷第一号、一九二八年二月、七三ページ。

## 二 社会主義理論

安部磯雄の実践活動の検討にはいる前に、彼が社会主義運動において理論的指導者とみられるにいたった社会問題に対する彼の理論を、『社会問題解釈法』（一九〇一年四月）について検討しておこう。安部の『社会問題解釈法』は、「社会問題」という言葉自体が、まだ日本人にとってなじみのない時代に、すでに先進の欧米諸国で試みられている社会問題の解決方法を能うかぎり幅広く網羅してそれを体系化したものであって、同志社在学時代以来の問題であった社会問題研究の一応の到達点を示したものである。もちろん安部が一九二一年に刊行した『社会問題概論』の方が、二〇年の研鑽の結果、『社会問題解釈法』よりはるかに体系的になっており、第一次大戦後の本格化した社会問題研究に資したところ極めて大きかったが、前著『社会問題解釈法』が日本の経済学界に与えた影響には到底比すべくもなかった。明治後半期に経済学を学んだ人々にとって、『社会問題解釈法』は必読の書であったのである。

『社会問題解釈法』の中でまず安部磯雄は、「歴史は是れ進歩発達の記録にして吾人は此中に平等主義の大勢が滔々として進み行くの壯観を見ずんばならず」と述べて、歴史を平等主義の進歩発展の記録として把握する。そしてその平等主義の進歩発展を、道徳上、政治上、経済上の三つの面において検討する。平等主義は道徳上においては、古代以来着実に進歩発展しており、さらに政治上においてはフランス革命を画期として急激な進展を示した。ところがそのフランス革命は、社会のあらゆる不平等を解決すると期待されながら、政治上の平等とは裏腹に経済上の不平等

をもたらしてしまった。「仏国革命後、世界は幸にして物質上、無比の進歩をなせしが、忽ち経済上に大不平等を来し、先きに君主の抑圧より免れし人民も今は亦資本家という者のために生殺与奪の権を握らるるに至<sup>(2)</sup>」ったのである。かくして現代二〇世紀の最大の問題は、道德・政治の両面と逆行して拡大しつつある経済面における不平等の解決でなければならぬとして、安部は社会問題の検討に進むのである。

安部磯雄は社会問題を定義して、「貧民問題」<sup>(3)</sup>、すなわち「人類社会より貧困という事を除去し貧富の懸隔を消滅」<sup>(4)</sup>させることだとする。なぜなら、「社会問題の研究は如何に多岐に亘るにもせよ、詮じ来れば如何にして貧民を救い、貧富の懸隔を滅し、更に貧困という争を根本的に社会より除去すべきかに在<sup>(5)</sup>」るからである。したがって欧米の学者は、Social Problems と複数形で社会問題を表わすが、安部はこれに対して単数形 Social problem の方が適當であると唱える。さらに彼は「社会問題の本領は如何にして貧富の懸隔を滅絶し進んで社会より全く貧困という病源を除去するにあれば……社会問題の研究という事は問題の研究にあらずして解釈法（＝解決法のこと——辻野）の研究なる事を知らざるべからず<sup>(6)</sup>」として、結局社会問題の研究とは貧困問題解決法の研究にはかならないことを明らかにする。

それでは安部磯雄は、貧困はなぜ起こるのかという問題についてどのように考えていたであろうか。本書第二章は「貧困の起因」と題されており、その中で彼は「貧困の第一原因とも称すべきは生財の不完全にして不充分なること是なり。……第二の起因は浪費にして、彼の生財の不充分なるに加えて更に其得たる所のものを浪費するに至りては其結果貧困の来るべきは蓋し怪むべきことにあらず。……第三の原因は不公平なる分配に在りて、是れ社会問題研究上最も注意すべき事なりとす<sup>(7)</sup>」と、貧困の三つの原因をあげている。この中でも「不公平なる分配」が最も重要な原因とされているが、その「不公平なる分配」は何によるかと言うと、それは「独占事業」<sup>(8)</sup>であるとされる。



このような原因によって生じた貧困の解決法、すなわち安部の言う社会問題解決法は次の五つである。

- (1) 慈善事業
- (2) 教育事業
- (3) 自助的事業
- (4) 国家的事業
- (5) 根本的改革

第一の慈善事業とは「個人或は個人的団体が衣食住の扶助を貧者に与うるもの」<sup>(9)</sup>である。第二の教育事業は「決して一般の教育事業を指すものにあらず、唯貧困者を教育する事業を指すものにして」、「大学殖民事業」<sup>(10)</sup>（いわゆるセツルメント）はその代表的なものである。第三の自助的事業は「全く貧困者が他人の扶助を待たず自立的に貧困問題を解せんとするもの」<sup>(11)</sup>で、労資間の利益分配制とか、労働組合、消費組合、信用組合等がこれに当たる。以上述べた三種の事業は、その主体が個人あるいは個人的団体であるが、第四の国家的事業は、その主体が国家であつて、たとえば義務教育制（安部は「強迫教育」という言葉を使っている）とか、イギリスの救貧法とか、ビスマルクの保険法だとかがこれに当たる。第五の根本的改革は、以上述べた四種の事業とその性質を根本的に異にする。すなわち慈善事業・教育事業・自助的事業・国家的事業は「現今の社会組織を其儘に維持して……唯これに何等かの改良を加えんことを目的と」<sup>(12)</sup>しているが、根本的改革は「現社会の組織を打破して新しき基礎の上にこれを再設せん」<sup>(13)</sup>とするものである。なぜなら「貧困という疾病は現社会の構造に伴う所の痼疾にして、単に外部に膏藥を貼り或は売藥を服する位の姑息手段にして治すべくもあらず、宜しく激烈なる外科術を行ひ以て根本的の療法を試みざる」<sup>(14)</sup>をえないからである。

社会主義こそ、実にかくのごとき根本的改革の具体的現われであるが、その社会主義を定義して、安部磯雄は「社会主義の主唱する所は生財の機関を悉く国有となし、其国家が年々産出する所のものを人口に応じて平分せんとするにあり。即ち資本、製造所、交通機関、土地等凡て生財に必要なものを挙げて国有となし、人々は各応分の働きをなして平等の収入を得るに在<sup>(66)</sup>」ると述べている。したがって社会主義は「主として経済上の議論に懸<sup>(67)</sup>」つているとされるのである。そしてこの社会主義は「平和的に現社会の組織を根本より改造せんことを主唱<sup>(68)</sup>」し、「腕力に訴えて各国の主権者を謀殺するが如きは、社会主義者の最も忌む所にして、彼等の目的は文章、演説、議会等あらゆる文明の機関により正々堂々平和的に社会の改造を謀らんとするにあ<sup>(69)</sup>」るのである。このような社会主義のお手本が、「カール、マルクスの学識を根拠として起り、フェルデナンド、ラサールの率先によりて政治運動となり、今やベーベルなんどいえる人物によりて率いられ、一大政党として根本的社会改造を主唱する独逸の社会主義<sup>(70)</sup>」であるとされる。さらに社会主義は「希望が遠大なるだけに其時日を要することの多きは素より怪むべきことにあらず<sup>(71)</sup>」、その実現にはある場合には何百年もかかるかも知れないと安部は述べている。

ところで以上述べてきた五種の「社会問題解釈法」相互間の関係はどうであろうか。この点について安部磯雄は次のように述べている。

「各種の解釈法には各其短処と長処を有する……若し効力の及ぶ事広く且つ遠きと言うを以て標準とせんか、第一は第一より、第三は第二より優等なる解釈法と言わざるべからず。然れども若し其実行の期し易き点より論ずれば、第四は第五に優り、第三は第四に優りて、当に反対の結果を来すべし。されば吾人は何れの解釈法も其短処と長処を併せ有するを忘るべからず。彼の印度に於ける四千万の同胞が昨年飢饉に瀕しつつありしに對しては教育事業を主張したりとて何の益かあらん。況んや彼等に自助的事業の必要を説くにおいておや。唯彼等を救い得べき

は慈善事業あるのみ。是れ素より明白の事なれども、慈善事業が決して万能力を有せざる事も亦明白の事にあらざるや。慈善事業は慥かに昨年印度に於ける惨況を救い得たりとするも、四五年に一度の割合を以て凶年の災害を蒙る彼等を将来の飢饉より如何にして救い出さんかを考うるに至りては、慈善事業なるものが決して永遠的救助の途にあらざるを知るべし。然らば彼等を永久に救うの方法如何。吾人は先づ彼等を教育して自助の途を学ばしむるにあらざるを信ず。更に進んで彼等の生活に根本的の革命を起すの必要あるを信ず。しかも印度の飢饉なるものは人意的に起るものにあらずして、全く天候の然らしむる処なり。若し彼等にして初夏と冬期とに於ける降雨を得ざれば忽ち食物に欠乏を生ずるに至る。然らば如此き氣候上、不安心の土地に住する人民が単に農業のみに其生を托すべからざるは明白なることにあらずや。然れども英国政府の方針は自ら製造に従事して印度人に其原料を産出せしむるに在れば、今日に至るも尚お印度人をして工業に従事せしむるの策を講ぜざるなり。飢餓の為に惨死する印度人や実に憐むべし。然れども慈善事業は単に姑息法に過ぎずして、印度人を永久に救うの途は彼等をして半ば農業に依り、半ば工業に依らしむるに在るのみ。茲に於てか目下の危急を救助する処の方法が決して根本的に其災害を除去するものにあらざるを知るべし。然らば根本的の革命は如何。已に陳べたる如く其効を奏する事頗る顯著なるべくも、斯る激烈なる手段は容易に採用せらるべきものにあらず。見ずや、彼の外科術を応用するに当りては、先ず其患者に充分なる滋養物を与え、徐々に其健康を得るを待ちて始めて切開をなすにあらずや。されば印度人をして其職業を転ぜしむるが如きは、一朝一夕にして為し得べき事にあらず、先ず多年の教育を施して始めてこれを決行すべきなり。社会主義の如きも亦然り。其説く所頗る遠大にして、或人は斯る理想が終に実現せらるるに至るべきやをさえ疑えり。独逸の有名なる社会主義論者ロッドベルトルは社会主義の實行せらるるには尚お五百年の星霜を要すべしと言いたりき。されば社会主義が今日の危急を救うに効力の少なきは言うまでもなき事なり。吾人は如此、其種類

を異にせる解釈法を有せり。吾人は果して何れを撰ぶべきか。余は各種の解釈法を併せ用ゆるは最も策の得たるものなりと信ず。慈善事業を応用すべき処には之を用い、自助的事業の応用すべき処には之を用いよ、根本的革命の如きはこれを理想として採るも亦可ならずや。」<sup>(2)</sup>

要するに各解釈法は病人に対する治療法のごときもので、それぞれの病状(条件)に対して最もふさわしい治療法(解釈法)を採るべきであるとするのである。したがって社会主義者を自認する安部磯雄も「吾人は社会主義を以て終極の解釈法なりと信じ、即ち一度は現社会を変じて社会主義の世となさざれば貧困という難病は決して治療せられざるべきを信ずると雖も、此目的を達する前には前四種の解釈法を併せ用ゆべきは明白なることなりとす」と述べて、改良闘争に全力をあげてとりくむ必要性を強調するのである。にもかかわらず彼は次章「実践活動」でみるように、社会主義の啓蒙宣伝活動に精力的にとりくんだのであるが、それは「今日社会主義を唱導して憚らざる所以のものは単に五百年後に実現せらるべき理想を空論するにはあらずして、今日社会主義を抱持すれば忽ち我社会に影響を及ぼすべきこと甚だ多きを信ずれば」こそであった。<sup>(3)</sup>

註(1) 安部磯雄『社会問題解釈法』一九〇一年(東京専門学校出版部刊)一〜二ページ。

(2) 同右 三〜四ページ。

(3) 同右 五ページ。

(4)・(5) 同右 六ページ。

(6) 同右 一一ページ。

(7) 同右 二二〜二三ページ。

(8) 同右 五三ページ。

(9) 同右 一四〜一五ページ。

(10)・(11) 同右 一五ページ。

- (12) 同右 一六ページ。
- (13) 同右 一七〜一八ページ。
- (14)・(15) 同右 一八ページ。
- (16)・(17) 同右 三五五ページ。
- (18)・(19) 同右 三五二ページ。
- (20) 同右 三五四ページ。
- (21) 同右 四五一ページ。
- (22) 同右 一八〇二二ページ。
- (23) 同右 四三八ページ。
- (24) 同右 四五一ページ。

### 三 実践活動

以上述べたように、社会問題に対する理論的究明を深めていた安部磯雄が、社会主義研究会で理論的指導者の立場に立ったのは当然のことであった。ところで当時昂揚していた労働組合運動は、社会主義研究会にも影響を及ぼし、会員の中には積極的に労働組合と関係を結ぼうとする者も現われた。そしてついに一九〇〇年(明治三十三年)一月、社会主義研究会は、「社会主義の原理を討究し、之を我国に應用するを以て目的とす」(規約第二条)る社会主義協会へと、発展していった。ところが一時昂揚した労働組合運動も、その年三月に施行された治安警察法によって大きく衰退に向かい、局面打開の途を社会主義政党運動に求めるに至り、日鉄矯正会のごときは、「若し社会主義を基礎として政党が組織されるならば二千有余の組合員は悉くこれに参加すべし」と、片山潜在伝えてきたほどであった。そこで社会主義協会の中心メンバーである安部磯雄、片山潜、幸徳秋水、西川光次郎、河上清、木下尚江の六名は、

一九〇一年五月二〇日、「社会民主党宣言書」を発表して、社会民主党を結成した。

安部磯雄の起草になる「社会民主党宣言書」は、「如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは実に二十世紀に於けるの大問題なりとす」との冒頭をもって始まり、「若し直截に其抱負を言えば、我党は世界の大大勢に鑑み、経済の趨勢を察し、純然たる社会主義と民主主義に依り、貧富の懸隔を打破して全世界に平和主義の勝利を得せしめんことを欲するなり」として、次の八項目の理想綱領と二八項目の実践綱領を掲げた。

#### 理想綱領

- 1 人種の差別政治の異同に拘らず、人類は皆同胞たりとの主義を拡張すること。
- 2 万国の平和を来す為には先ず軍備を全廢すること。
- 3 階級制度を全廢すること。
- 4 生産機関として必要なる土地及資本を悉く公有とすること。
- 5 鉄道、船舶、運河、橋梁の如き交通機関は悉くこれを公有とすること。
- 6 財富の分配を公平にすること。
- 7 人民をして平等に政権を得せしむること。
- 8 人民をして平等に教育を受けしむる為に、国家は全く教育の費用を負担すべきこと。

#### 実践綱領

- 1 全国の鉄道を公有とすること。
- 2 市街鉄道、電気事業、瓦斯事業等凡て独占的性質を有するものを市有とすること。
- 3 中央政府、各府県、各市町村の所有せる公有地を払い下ることを禁ずること。

- 4 都市に於ける土地は挙げて其都市の所有とする方針を採ること。若しこれを速に実行する能わざる場合には法律を設けて土地兼併を禁ずること。
- 5 専売権は政府にてこれを買上げること。即ち発明者に相当の報酬を与え、而して人民には廉価に其発明物を使用せしむること。
- 6 家賃は其家屋の価格の幾分以上を徴収する能わずとの制限を設くること。
- 7 政府の事業は凡て政府自らこれに当り決して一個人若くは私立会社に受負わしめざること。
- 8 酒税、醬油税、砂糖税の如き消費税はこれを全廃し、之に代うるに相続税、所得税及び其他の直接税を以てす。
- 9 高等小学を終るまでを義務教育年限とし、月謝を全廃し、公費を以て教科書を供給すること。
- 10 労働局を設置して労働に関する一切の事を調査せしむること。
- 11 学齡兒童を労働に従事せしむることを禁ずること。
- 12 道徳健康に害ある事業に婦人を使役することを禁ずること。
- 13 少年及び婦女子の夜業を廃すること。
- 14 日曜日の労働を廃し日々の労働時間を八時間に制限すること。
- 15 雇主責任法を設け労働者が服役中負傷したる場合には雇主をして相当の手当を為さしむること。
- 16 労働組合法を設け労働者が自由に団結することを公認し、且つ適當の保護を与うること。
- 17 小作人保護の法を設くること。
- 18 保険事業は一切政府事業となすこと。
- 19 裁判入費は全く政府の負担となすこと。

- 20 普通選挙法を実施すること。
- 21 公平選挙法を採用すること。
- 22 選挙は一切直接とし且つ無記名とすること。
- 23 重大なる問題に関しては一般人民をして直接に投票せしむるの方法を設けること。
- 24 死刑を全廃すること。
- 25 貴族院を廃止すること。
- 26 軍備を縮少すること。
- 27 治安警察法を廃止すること。
- 28 新聞条例を廃止すること。

そしてこれらの実現方法については、「吾人の説は頗る急激なりと雖も、而も其手段は飽くまでも平和的なり」として、普通選挙法と比例代表制とを要求したのである。この「社会民主党宣言書」は『万朝報』、『毎日新聞』、『報知新聞』等の日刊新聞と『労働世界』に掲載され、一般社会は「青天に霹靂を聞けるが如く、驚きの眼を開いて之を迎えた<sup>(2)</sup>」のである。

社会民主党結成の試みは、日本最初の社会主義政党という点で画期的であったばかりでなく、「社会民主党宣言書」の起草者・安部磯雄にとっても、社会主義理論の完成という意味で、画期的であった。すなわち、安部磯雄の社会主義理論を貫く一本の赤い糸である「民主主義的手段による社会主義の実現」という命題は、このとき確立されたのである。したがって彼は、言葉の厳密な意味で社会民主主義者であり、その後の彼の社会主義運動は、すべてこの延長線上に展開されるのである。



社会民主党は、「社会民主党宣言書」にも明らかなように、徹底した合法主義の立場をとっていたにもかかわらず、治安警察法第八条第二項違反を口実に、即日結社禁止となったのであるが、そこには、安部磯雄の面目を伝えるエピソードがある。というのは、安部磯雄らの政党結成の動きをかぎつけた当局側が派遣した刑事を、安部は逆にその共鳴者に変えてしまい、そして宣言書がいよいよ印刷所に廻されようとする数日前になって、今度は所轄の警察署長が安部磯雄を訪問してきて、綱領中軍備全廃(縮少)、一般人民投票制、貴族院廃止の三項目さえ削除するならば、結党を許可しようという政府側の内意を伝えてくると、彼は「飽くまでも理想主義で進む決心であったから、此等の三ヶ条を削除することは卑怯の行為であると考え断然これを拒絶<sup>(8)</sup>」したのである。

社会民主党が禁止された後、社会主義者たちは再び社会主義協会に立てこもり、社会主義思想の啓蒙・宣伝活動に従事した。一九〇三年(明治三六年)になると、満州・朝鮮の市場をめぐる激しく対立していた日露の関係はいよいよ險悪になり、一触即発の状態になった。社会主義協会は一〇月八日に続いて一〇月二〇日に第二回非戦演説会を開いたが、安部磯雄はその席上「世界の平和境スイスについて」と題して演説を行ない、その中で「もし平和が人道であるならば、平和を世界的に宣言して、それがため一国が減んでも、なんら悔いるには及ばないではないか<sup>(4)</sup>」と大胆に平和を訴えた。

安部磯雄は一九〇四年(明治三七年)五月平民社から平民文庫の一冊として『地主之理想国瑞西』を出した。この中で安部は、対外的には中立主義・平和主義を国是とし、その内部においては民主主義が徹底し、さらに「社会問題が殆んど全く政府の手によって解釈せられつつあるを見れば、社会主義者の主張の幾分は慥に実行せられて居るといっても善い<sup>(5)</sup>」スイスを、「地上之理想国」として紹介したばかりでなく、「抑も我日本程瑞西に類似せる国が他にある<sup>(6)</sup>」か、「想うに我国の前途も亦瑞西の如くなるではないか。否斯くなさねばならぬのではないか<sup>(7)</sup>」、「四大国の間に

介立せる我日本は軍神としてよりも寧ろ天使として東洋の平和を来すべき天職を有して居るのではないか<sup>(8)</sup>として、日本の進むべき道が「東洋のスイス」たることにあることを示した。そして彼はその「結論」において、「吾人は我国民が日露戦争に熱中するに当り、殊に此一小冊を公にして我親愛なる同胞に献ずることを喜ぶものである<sup>(9)</sup>」と述べて、日露戦争に対して反対の意志表示をしたのである。

しかし安部の反戦平和論は、幸徳秋水・堺利彦を中心にして集まる平民社の社会主義者のそれとは大きく異なっていた。安部の反戦平和論は、絶対無抵抗主義の平和論であったのに対して、平民社グループのそれは、戦闘的な反戦平和論であったからである。さらに「内部は烈火<sup>(10)</sup>」のごとく燃えていても、あくまでも「表面は冷静<sup>(11)</sup>」であることを信条とする安部は、熱狂的な運動に生きがいを見出している平民社の社会主義者と肌が合わなかった。したがって平民社の反戦運動がだんだん烈しくなり、それに対して政府の弾圧も厳しくなると、安部は平民社の運動をある種の苦々しさをもって眺めるようになり、しだいに実際運動から遠ざかっていった。そして一九〇五年（明治三八年）五月には、当時彼が部長をしていた早稲田大学野球部を率いて渡米した。出発の時安部は、平民社の玄関で堺利彦に挨拶をした後「あまり警察と喧嘩などせんように、まあなるべく穏やかにやって下さい<sup>(12)</sup>」と言ったが、彼の言葉は荒畑寒村などの若い社会主義者からは、「何という理解と同情を欠いた言だろうとひそかに憤慨<sup>(13)</sup>」されたのである。

日露戦争が終わり、政府の弾圧のために平民社が解散すると、それまで反戦の一点で小異を捨てて大同についていた唯物論的社会主義とキリスト教社会主義の二大潮流は再び分裂した。そして一九〇五年（明治三八年）一月には、石川三四郎を発行兼編集人として、キリスト教社会主義の機関誌『新紀元』が発行されることになるのであるが、安部磯雄は木下尚江とともに石川を助けた。有名な「社会主義は物質的基督教也、基督教は精神的社会主义也」という文句は、『新紀元』に拠る人たちのモットーであった。しかしながら同じモットーのもとにおいても、安部は木下・

石川と大きな違いを示した。すなわち、木下が既存の権威や権力を仮借なく批判することに情熱を燃やし、石川が人間の精神的な内面の生活を重視したのに対して、安部は「独占事業論」、「保護政策と平和主義」、「トラスト論」、「東京市の下水経営」、「東京電車市有論」等の経済に関する論文を毎号のごとく発表して、彼の関心があくまで社会のしくみの変革にあることを明らかにしたのである。

一九〇七年（明治四〇年）一月、日刊『平民新聞』が発刊されることになり、これを契機にして唯物論派社会主義者とキリスト教社会主義者の大同団結が再び行なわれた。しかしながら、安部磯雄は特別寄稿家として日刊『平民新聞』に協力することにはなったが、この頃を境にして、彼は社会主義運動の舞台から、決定的に遠ざかっていった。それまで、普通選挙権を獲得し労働者の代表を多数議会に送り込むことによって社会主義を実現するという、議会議の路線を歩んできた社会主義運動は、幸徳秋水が直接行動論を唱えることによって大きく急進化していったが、幸徳流のラディカリズムは、安部の信条に反するものであった。さらに幸徳秋水と菅野スガの恋愛に象徴される唯物論派社会主義者の生活ぶりは、クリスチャン安部磯雄を同じ陣列に止めさせ得ないほどのものであった。また当時、彼が教壇に立っていた早稲田大学の規模の拡大につれて彼の授業時間数も非常に多くなり、社会主義運動にさく時間を、ほとんど見出し得なくなった。このような原因が重なりあって、彼は社会主義運動の舞台から一時退き、書齋の人となったのである。

したがって一九〇七年二月一七日の日本社会党第二回大会で激烈に展開された議会議政策論対直接行動論の論争とは、彼は無縁であった。慶応大学中村勝範助教授が言われるように、安部磯雄はこの論争を「全く傍観していた」<sup>(4)</sup>のである。しかしながらこの安部の「傍観」は議会議主義的社会主義が、直接行動的社会主義に主導権を奪われたこと「重大な一因」<sup>(45)</sup>であったとか、「この安部が議会議主義対直接行動の論争に参加し、自己の信念を主張していたならば

状勢はかなりかわつていたかもしれない<sup>(16)</sup> (傍点辻野) と言うのはどうであろうか。もちろん安部磯雄はこの論争を「傍観」すべきではなかったが、しかしながらこの時点では安部も、「将来若し社会党が有力なる政党たるの日あらんには其首領たる者は必ず安部なるべし<sup>(17)</sup>」と堺利彦などから言われたかつての人望と影響力は失っており、社会主義運動のリーダーシップは、中村助教教授も言われるように幸徳と堺なканずく幸徳が握っていたのである。したがって議会主義的社会主義の着実な発展のためには、平民社時代の反戦運動及びその後の運動の時点において、安部がもう少し実践的姿勢を示し、幸徳・堺と並んで一方の指導者としての地位を確保し続けていたならば、「状勢はかなりかわつていたかもしれない」のである。

- 註(1) 安部磯雄「明治三十四年の社会民主党」『社会科学』第四卷第一号、一九二八年二月、七四ページ。
- (2) 石川旭山「日本社会主義史」(『資料明治社会運動思想史』第二卷、一九六八年、青木書店刊所収) 三四〇ページ。
- (3) 安部磯雄「明治三十四年の社会民主党」『社会科学』第四卷第一号、七七ページ。
- (4) 片山 哲『安部磯雄伝』一九五八年(毎日新聞社刊) 一二五ページ。
- (5) 安部磯雄『地上之理想国瑞西』一九〇四年(平民社刊) 一四九〜一五〇ページ。
- (6) 同右 一四五ページ。
- (7) 同右 一四七ページ。
- (8) 同右 一四七〜八ページ。
- (9) 同右 一五一ページ。
- (10) 安部磯雄『理想の人』一九〇六年(梁江堂刊) 九三ページ。
- (11) 荒畑寒村『寒村自伝』上卷、一九六五年(筑摩書房刊) 九八ページ。
- (12) 中村勝範『明治社会主義研究』一九六六年(世界書院刊) 八三ページ。
- (13) 山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」(『資料日本社会運動思想史』第二卷、一九六八年、青木書店刊所収) 三七四ページ。